



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	R.N. ベラーとE. デュルケム : R.N. ベラー著『デュルケムと歴史』を素材に
Author(s)	浅川, 和幸
Citation	北海道大学教育学部紀要, 65, 207-218
Issue Date	1995-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29452
Type	departmental bulletin paper
File Information	65_P207-218.pdf



R.N. ベラーと E. デュルケム

— R.N. ベラー著『デュルケムと歴史』⁽¹⁾を素材に—

浅 川 和 幸

R.N. Bellah and E. Durkhiem

Kazuyuki ASAKAWA

1 はじめに

(1) 『心の習慣』と現代日本

1991年に邦訳されたR.N. ベラーの『心の習慣』⁽²⁾は、1990年代も中盤にさしかかった日本社会の行く先に、社会科学はとりわけ教育科学は、何をすべきであり何が可能であるかの重要な示唆を与えていると筆者は考えている。

『心の習慣』の「日本語版への序文」において、ベラーは簡潔にこの書の論点を述べている。それは、現在の合州国で優勢である「お互いどうしから人を切り離そうとするラディカルな個人主義は、実は強い個人主義ではなく弱い個人主義を作りだすことになり、結果的に専制をもたらしことになるのではないかという強い危惧と、それにかわって「個人と共同体が相互に支え合い強化しあうようなあり方」の可能性の吟味である⁽³⁾。すなわち、個人主義を現実の陶冶する社会的な文脈を、とりわけ共同体のあり方の分析を通して、個人主義と共同体との善き関係がどのように再生するかを探るところにある。

ベラーの歴史認識のパースペクティブは、アメリカ合州国史全体を覆うものであるけれども、特に1980年代中期のアメリカ合州国が念頭におかれている。共和党政権の新自由主義のもとで、ニューディール政策以降の社会的合意への全面的反攻が行われ、従来からの進歩主義思想が勢いを失っていった、とベラーはみている⁽⁴⁾。この状況において倫理的個人主義の弱体化が顕著となっていると認識し、それを背景として専制政治化への危機が生じているのではないかという危機感を、ベラーは抱く。筆者が注目するのは、ベラーが市民社会を形成せしめる、換言するなら国民を社会へと志向させめる基層のメカニズムの変容を問題としているところにある。すなわち、新たな社会的合意を形成する営みが不在であるのではなく⁽⁵⁾、この営みを社会的に支える国民の「心の習慣」とそれを育む社会的基盤（共同体）が変容あるいは質的には喪失しているのではないか、という点にある。

ところでベラーは、『心の習慣』をアメリカ合州国の問題として考え、日本を関係づけるにあたって慎重である。日本を「倫理主義的個人主義を創出するための長い努力が重ねられてきている」⁽⁶⁾と評価している。しかし、ベラーが提起した「心の習慣」と共同体の変容を基礎とした専制政治の台頭の可能性は、現在の日本社会においてはこれと異なる形態ではあろうが、社会形成の基層のメカニズムの根幹が揺らいでいるという点で同質であり、専制政治の台頭の可能性も含めて、現実的問題であると筆者は考えている。

さらに日本社会は、国民経済・政治の社会的合意、とりわけ配分的問題の解決の多くを、1975

年以降「スト権スト」⁽⁷⁾が押さえ込まれてからは、より一層「高度経済成長」期がそうであったような世界史的にみても異例な経済的成功に依存するようになった。労資関係においては、企業の成長至上主義と競争至上主義を、「パイの論理」と「労資協調」がささえた。配分的問題に社会的に決着をつけるのは、学歴主義による「公平の論理」と個人的な努力——「ガンバリ」——にもとづいた「競争」で、社会的な争点を表面化せずにはすませてきた。換言するなら、社会的な争点を解決する能力と営みの不在を経済成長が担保した、と筆者は考えている⁽⁸⁾。ところが日本経済の全般的な停滞局面となった現在になって、研ぎ澄ませすぎた自らの経済力によって、経済的活力の源泉であった基盤そのものが動揺し始めている。これを引き金に始まるポスト「成長」の時代は、社会的合意の形成を、異なる次元——個人的努力^{イコール}＝「競争」——に転嫁しえた時代の終焉である。一方で配分的正義に関する具体的な内実の形成と、現実的な利害の調整に関する社会的な営みが不可避に生起する時代となる可能性もある。けれども他方で、社会的試練の営みの不在を「根拠」とした、あるいはこのような営みを社会的秩序を混乱させるものとして圧殺するために、「教師の国家」⁽⁹⁾が登場する可能性を否定できないだろう。この意味で、筆者はベラーの問題意識を、日本社会の現状を念頭において——すなわち、ベラーは1975年の『破られた契約』において、「破られた契約」の「回心」を問題にできたけれども⁽¹⁰⁾、我々は「中身の無い、空の契約」の「中身」と「契約」という営みそのものの創造を問題にせねばならない——深刻に受けとめたいと思っている。

そのために筆者は、ベラーが『心の習慣』を生み出すにいたる思想形成過程全体を、特にアメリカ人の「心の習慣」を検討するために使用された社会分析の方法の検討も含めて行わねばならない、と考える。

まずベラーが、先行する社会理論をどのように摂取、批判、克服したのかという問題についてふれたい。

(2) ベラーとデュルケム

ベラーの研究業績は1952年から始まる。1959年までの文化人類学的研究以外の初期の著作において、理論的基盤はM. ウェーバーとT. パーソンズが提供している。例えば『日本近代化と宗教倫理』(1957年)においてベラーは、社会変動と宗教との関係を、ウェーバーによって位置づけており、社会的な価値が社会変動に与えるインパクトをE. デュルケムを援用して説明することは行っていない⁽¹¹⁾。一方ベラーは学論形成の初期において、文化人類学や宗教社会学に関する論考とともに、デュルケムの社会学理論についての検討を2度にわたって行っている。始めのものが、本稿で取り上げる1959年の「デュルケムと歴史」(以下「歴史」と略する)であり、もうひとつがデュルケムの道徳論に関する論文撰集である『エミール・デュルケム 道徳論と社会論』⁽¹²⁾(1973年)である。パーソンズ、ウェーバー、デュルケムのそれぞれの理論の影響の中でも、デュルケムの位置が大きい。特にベラーが本格的な紹介と検討を行っているデュルケムを、まず筆者が取り上げる所以である。

さらにデュルケムの影響に注目する理由は、ベラーとデュルケムの思想的営みの背景にある社会変革に対する実践的意識と、それを検討するあり方の、両者における同型性にある。このことを明らかにする前提として、ベラーとデュルケムの問題意識のアウトラインを、それぞれたどっておこう。

ベラーの問題意識について。ベラーが『心の習慣』の最終章「アメリカ文化の変容のために」

において強調しているのは、「分離の文化」⁽¹³⁾を克服する社会運動であり、それぞれの場所における文化と生活の分裂に、まとまりを取り戻し、文化の社会的なエコロジーを作る実践である。この社会運動は、経済・政治の領域にも変革の対象を求めるけれども、特に労働・仕事の意味の変化(コーリングへ)の問題を重要視する。全体を通じてベラーが変革の対象となると考えたのは、アメリカ合州国の伝統——「聖書主義的」伝統、「共和主義的」伝統——を生かし直すことによって、諸共同体——「記憶の共同体」となることを求めること——と「倫理的個人主義」を再生することである。すなわち「心の習慣」の再生は、共同体と個人主義の両者の善き関係の再生に他ならない。

他方デュルケム(1858年～1917年)が社会理論を形成したのは、19世紀末から20世紀初頭のフランスである。デュルケムの社会理論を、フランス社会の変革に対する実践的意識に彫琢されたものとして、その形成過程をみるならば、ベラーの問題意識との共通点がおのずと明らかになる。デュルケムの思想形成過程をこの観点から略述しておこう。

まずデュルケムは、『社会的分業論』(1893年。以下『分業論』と略する)において、「機械的連帯」から「有機的連帯」への社会進化の過程において、「有機的連帯」を可能にするものとして、「国家」の役割が肥大化することに注意を促している。一方で「機械的連帯」のもとでの「集合表象」が「有機的連帯」のもとで衰弱することに伴って、人々の個性化を背景に、個人主義の「崇拜」が新たな「集合表象」となるにいたると考えている。さらに『自殺論』(1897年)を経て、この「個人主義」がもっている本質的な不安定さを把握する。ついで1902年の『分業論第2版』の序文「職業的団結についての若干の注意」において、この「個人主義」の不安定さを緩和するために、国家との間に中間的な集団が必要であることを、そしてこの中間的な集団によって、職業的な倫理が生まれ、構成員が陶冶されることを、述べている。この観点は、『道徳教育論』(1902～03年)⁽¹⁴⁾において、さらに発展する。フランス第三共和制のそして人類にとっても普遍的価値である個人の尊厳という基本的な価値を道徳教育の根幹に据え、これを維持しつつ個人主義の利己主義化をどう防ぐのかを課題とし道徳性の要素を検討している。この点は後年の『宗教生活の原初形態』(1912年。以下『原初形態』と略する)では宗教生活を対象としているけれど、社会的現実を社会的な意味に結びつける象徴機能や、儀礼等を通じた社会的な意味の活性化と個人への内在化の問題として深められる。

この思想形成過程全体を、デュルケムの19世紀末から世界大戦前夜までのフランス社会に対する実践的な問題意識への回答であると考えれば、次のように総括することが可能であろう。デュルケムは、個人が自律的存在でありながらも社会的連帯をより高いレベルで実現することを、思弁的ではなく実践的に考察してきた。その結果として、個人が国家に直接対峙することによる国家の優越に対して、国家と個人の間に中間集団を位置づけ、国家と中間集団のパワー・バランスによって、個人を擁護するという考え方をもつに至る。さらに、この中間集団において個人主義の陶冶——利己主義化を防ぐ——を結びつけるに至り、そのメカニズムの考察へと進んだのである⁽¹⁵⁾。

先の議論に戻ろう。デュルケムの個人主義／中間集団の議論は、ベラーの個人主義／共同体の議論と、それぞれが対象とした背景は異なるけれども⁽¹⁶⁾、社会的合意の動揺ないしは弛緩を実践の対象として受け止め、それを解決するというスタンスから問題意識を形成した結果として、同様に構成されているのである。

それでは次に、このような実践的課題を解決するあり方における「同型性」が、ベラーのデュ

ルケム評価の問題と、どのように関係しているのかが明らかにされなければならないであろう。ベラーの師であるパーソンズが『行為の社会的構造』(1937年。以下『構造』と略する)で行ったように、デュルケムの議論を、理論構築のための素材としてのみ扱ったのであろうか。この小論では、ベラーがデュルケムをとりあげた二つの論文のうち、最初の「歴史」について扱う。

2 「デュルケムと歴史」の構成と問題意識

「歴史」において、ベラーがデュルケム理論を検討するなかで明らかにしようとするのは、デュルケムの社会学方法論において、歴史の次元がその中心を占めていることである。なぜこのような課題をベラーは立てたのだろうか。

まずベラーは、現在構造＝機能主義が批判されている論調——構造＝機能主義が歴史の概念をもってない⁽¹⁷⁾、またそのため構造＝機能主義は、「政治的保守主義」や「現状の正当化」を行っている——を確認する。そして、デュルケムが「歴史に関心のない理論家として知られている」のは、かれが構造＝機能主義の創始者のひとりであるため、構造＝機能主義批判の文脈で評価されているからだ、と判断する(「歴史」447頁。以下「歴史」の場合は、頁だけを記す)。デュルケムに構造＝機能主義批判があてはまる根拠として、デュルケムの『社会学的方法の基準』(1895年。以下『基準』と略する)の幾つかの見解が上げられるけれども、ベラーは「構造＝機能主義的な立場が、本当に社会変動の理論と両立しないものであるかどうか」(447頁)そのものが問われなければならないと考え、この論文においてそれを課題とすると述べている。すなわちこの論文の課題は、構造＝機能主義が社会変動を扱いえることを、始祖のひとりであるデュルケムの議論の展開に即して、立証することである。

しかし、これだけがベラーの課題であるとする、ベラーが参照を促しているマートンの『社会理論と社会構造』の第1章「顕在的機能と潜在的機能」とは異なった観点から、構造＝機能主義を擁護するように思える。ところが、「歴史」の具体的論述過程にそってベラーの議論を見てゆくと、ベラーが構造＝機能主義を擁護するという消極的課題に拘泥したわけではないことが明らかになる。

ところで、ベラーがどのようにそれを具体化したのかを「歴史」の展開にそって略述してゆく前に、「歴史」全体の構成を記しておきたい。

「歴史」は、四つの部分から構成されている。便宜的にそれぞれの部分を項と呼んでおくと、それぞれの項のタイトルは順に、「社会学と歴史学：方法論的考察」、「家族、個人、分化」、「宗教、集合表象、社会変動」、「デュルケムの現代との連関性」となっている。本稿では、第1項を社会学と歴史学の方法論的考察として、第2項・第3項を合わせてベラーがデュルケムの社会変動論の骨格だと考えている構造的差異化と価値の社会変動へのインパクトとして、第4項をデュルケム理論の現代的問題への含み、として紹介する。

3 「デュルケムと歴史」の内容と結論

(1) 社会学と歴史学の方法論的考察

ベラーは最初に、「幾つかの点でデュルケムは、社会学と歴史学が実際二つの別々の学問分野であると考えられるかどうかを検討する点で、役に立ってきた」(448頁)と述べ、社会学と歴史学との関係を、特に方法の問題を含め、どのようなものとして把握していたかを分析する。

まず、1908年にデュルケムが「フランス哲学学会」において、歴史学と社会学について、「二つ

の方法もあるいは二つの敵対する概念はない」(同上)と述べていることを引用し、デュルケムが、歴史学が社会学と不可分であると考えていたことを強調する。他方で、デュルケムが行っている二つの学問間の区別に注意を促している⁽¹⁸⁾。

ベラーはデュルケムが、歴史学と社会学間には「二つの学問的原理があるのではなく、決してお互いを包摂するのではない、お互いの支え合いを必要とする、二つの視点がある」(同上)と考えていると総括し、彼の研究が長期的な社会変動についての「仮説」から演繹されていると述べる(449頁)。

しかしこの立場は初期からのものではなく、デュルケムが「モンテスキュー論」(1892年)において定式化した時点では、「歴史的過去」が「社会生活を動かす」という側面と、「現在の状況」が「社会生活を動かす」という側面が並立されるにとどまり、両者に潜む「二律背反を未解決のままにしておく折衷主義の」(450頁)立場をとっていたと、ベラーは考える。しかし『基準』(1895年)において、それが克服され、「一貫性をもった持続した安定した立場が採用された」(同上)。それは、「効用や利益の点から社会学的な現象の出現を説明することを求める究極的目的論」と、「諸段階の必然的に作用する継起の産物として社会学的現象を説明する歴史学的な決定論」の両方を、「決定的に拒絶する」立場の獲得である(同上)。すなわち、社会的な現象が出現する根拠は、現に作用している社会的環境のなかに存在する諸変数にあるのであって、「歴史的段階の仮説的継起も、仮説的未来の効用もあり得ない」と主張する立場を確立する(451頁)。しかしデュルケムは「決して歴史を放棄しなかった」(同上)。なぜなら、諸変数自身の深い理解に、歴史が不可欠であることに、デュルケムは固執しているからである(同上)。現在が成立することを、よりよく理解するために過去を知る必要があるという意味で、歴史が本質的役割をもっていることをデュルケムは強調をしていると、ベラーは総括するのである。

しかしこれだけではない。ベラーが注目するのは、デュルケムが歴史学と社会学の方法の本質的な類似、すなわち比較が用いられていること——『基準』第6章の「共起的变化の方法」にみるような——であるが、さらにそれを生かすためには、理論的に適切な類型学が用いられねばならないことを主張しているところにある。諸事実の無差別な收拾を行う社会学者と人類学者を批判する文脈で、「デュルケムは逆に、体系的で理論的に適切な類型学に基づいて、比較された事実が慎重に分類された時に、はじめて比較が有意義であり得ると強く主張している」(同上)と述べる⁽¹⁹⁾。デュルケムの分類の基本的な原則は、分析的で発生論的な含意があり、社会の型や社会的種族の配列は、単純なタイプから複雑なタイプへとおよそその継起を示すが、『『不可避な段階』の示唆がなく、発生論的概念は単一直線的な進化論で傷つけられてはいなかった」(同上)とベラーは評価している。

さらにベラーは、デュルケムの『基準』における議論を引用し、社会学に適用されるべき比較法として何をあげているかをみる。社会学に適用されるべき比較法は、ひとつの社会を対象にした場合、「かなりの期間のデータが存在する時」や、「データそれ自身が広範囲で体系的な違いを明らかにする時」に、用いられるべきである(452頁)。「同じ種の、複数の社会から得られた成果は、単一の事例を基礎にして到達した一般論を確証する上で望まし」(同上)いが、はるかに良いのは、「歴史学的で民族的資料の広範な領域を含む、社会類型の拡張された一連のものにそれを応用すること」(同上)であり、そのことによって諸現象の「成長の過程や行為の過程を理解すること」が「可能になる」(同上)。比較社会学が、「純粋に記述的であることをやめ、そして諸事実を説明することを欲する限り」、「発生論的」方法は必要である(同上)。

全体を通じてベラーは、デュルケムを「拡張された比較法」によって、彼の経験的作業の大部分が、またこれによって、社会学だけでなく人類学や歴史学に膨大な前進をもたらしたことを、すなわち「社会現象を説明する二つの——ひとつは社会的な機能、もうひとつは歴史的過去の——二者択一のやり方はなく、社会学的で同時に歴史的な、ひとつの説明方法があるのみであり、このような「成熟した」見地に早い時期から立っていたと、ベラーは評価した（同上）。

ここまでで方法論的な吟味を終え、デュルケムの社会学における「歴史的なるものの役割の概念」に分析を進める。なぜならデュルケムの社会学における歴史の問題は、「社会変動の理論を発展させる方向で」の「貢献」において、とりわけ高く評価されなければならないからである（同上）。

(2) 社会変動論の骨格——構造的差異化と価値の社会変動へのインパクト

ベラーは、デュルケムが『分業論』で社会システムの形態上の変化を「構造的差異化」として把握した、と述べる。具体的にはデュルケムが、形態変化の指標として「社会単位の数」や「社会の大きさ」、そして「動的」あるいは「道徳的」密度を取り上げ、この増加によって社会システムを構成する諸単位間の相互作用の強度が変わることを、さらに社会システムを構成する諸単位間の相互作用の強度の変化は諸単位間の競争を増加させ、増加した競争の適応反応として「構造的差異化」を生ずると指摘した、と言う⁽²⁰⁾。

ベラーは、「構造的差異化」の焦点が経済的組織にあると押さえたうえで、構造的差異化の「非経済的側面のあるものの吟味」を、デュルケムの『分業論』以降の著作のなかから取り出してゆく。それは、①「拡散したクラン」と「核家族」との関係、②「社会における個人の位置」そして「社会学的な基礎の上に、個人主義の説明すること」、③「個人主義と国家」の問題さらに「国家と二次集団の間の動的なバランス」、④法・制度にみる価値の普遍化の問題、である（以上453～455頁）。

ここで問題とされているのは、社会システムが構造的差異化を通じて個人の役割をどのように変えていったのか、という問題群である。この「個人の役割と社会変動との関係」に関するデュルケムの議論は、パーソンズの「制度化された個人主義」概念にも、大きな影響を与えたことを指摘している（455頁）。

次にベラーは、『原初形態』においてデュルケムが「集合表象」という概念を創造することによって、社会変動への価値の継続的なインパクトを分析することが可能になった、と主張する。

集合表象が「社会的基層」から生じそして反映するのと同時に、集合表象が一度実在するにいたって、独自に引き続く社会的進化に影響を与える「部分的に自律的な現実」になるということに、基本的な観点が準備された（457頁）。

ベラーはデュルケムが、「集合表象」の概念をつくったことによって、社会変動に「二重の貢献をした」と指摘する。それは①「集合表象」の表れるあり方についての理解をふやした点と、②宗教に象徴される「集合表象」⁽²¹⁾が、独自の展開論理をもって、社会変動に影響を与えるということ、である。すなわち先の「構造的差異化」が与える影響のベクトルとは逆の、「集合表象」が社会システムの変動に与える影響である。ベラーは、デュルケムの「集合表象」を価値と呼び換え、価値が社会変動へ与えるインパクトをデュルケムは発見している、と評価するのである。さらに

『フランスにおける教育の進化』（邦訳では『フランス教育思想史』、1904～1905年）によって、価値が体现された制度が、継続的にフランス社会へ影響する姿が記述されているとベラーはみる。総じてベラーは、デュルケムの「集合表象」を価値と読み替え、さらに価値が体现されたものとして制度を位置づけることで、これらが社会システムに与える影響をトータルに考察する視角をデュルケムは持っているとして評価するのである（以上 458～459 頁）。

最後にベラーは、デュルケムが導き出した結論として、以下の 2 点を上げる。

まず第 1 に、「制度化した集合表象（価値）が、例外的に長い一定期間を通して、そして多くの社会的文化的変動に直面し、影響を及ぼす能力があること」（459 頁）である。さらに第 2 に、「社会システムが、順調に運営されている限り、集合表象（価値）の受容されたシステムが問題にされないであろう」ということ。さらに付言して、「古いシステムが衰弱し、多くの騒動と社会的動乱の生じる時、想像上のものである新しいシステムが、定式化されるようになり、そしてその時新たに安定させられる社会的システムの確立に貢献する」（同上）ことである。

特にベラーは第 2 の点について、ウェーバーとの関係を次のように整理し、デュルケムの業績への再評価が必要であることに注意をうながす。

この見解とウェーバーのカリスマ革命との関係は、見落とされるべきではない。デュルケムは、社会的動揺の特質を強調し、ウェーバーはカリスマの反応を強調する。しかしそれらは、同じ過程のふたつの側面である（459 頁、註 61）。

ウェーバーは社会的行為者の問題として社会変革の問題を考え、デュルケムは社会システムの更新の問題として社会変革の問題を考えており、その点で「同じ過程」の「ふたつの側面」だとベラーはとらえる。社会変動に与える思想や理念の影響を強調した論者としてウェーバーの名をあげるのは当然であるが、デュルケムも「集合表象」概念を援用することによって、制度の社会変動への影響にまで考察の射程をのばすことが可能になっていたのだ、とベラーはデュルケムを高く評価しているのである⁽²²⁾。

(3) デュルケム理論の現代的問題への含み

論文の最後にベラーは、デュルケムに残された課題として近代社会における宗教の問題を指摘し、さらにデュルケムのプラグマティズムへの警句に対して注意を促す。

まずデュルケムは、文化と社会システムとの区別はするが、その相互関係を体系的に解決できずに、両者を「社会的」なものとして言及することにより混乱を生み出した、とベラーは述べる。この点は、パーソンズが『構造』で行った指摘と同じ趣旨であるが、さらに宗教も含めた文化と社会システムとの関係についての混乱と、デュルケムが本質的に宗教は、「科学と対立」しており、「伝統的な宗教が消滅しかかっている」と「信じて」いたため、「近代社会における宗教の位置」に関する全面的な研究に着手しなかった、とベラーは指摘する（460 頁）。そのため、社会自身を成り立たしめる、「神聖なるもの」（「道徳的敬意」の対象。頁は同上）についての検討が充分ではなく、残されている⁽²³⁾、と。

さらにベラーは、デュルケムの社会学的な認識論が、真実を相対的で変動するものとして認識することを根拠にプラグマティズムの変種であると紹介されていたことにたいして、デュルケムが反論を行ったことを紹介する。そこではデュルケムが、J. デューイのプラグマティズムをある

側面を称賛した一方で、W. ジェームズに由来するプラグマティズムを、「哲学的な合理主義の偉大な伝統への脅威としてではなく、合理主義を重要な部分としているフランス文化自身への脅威として考察」(同上)していることに、ベラーは注意を促している。個人主義理解とも関係するこの興味ある論点に対して、ベラーは残念ながらこれ以上の論及はしていない。

4 ま と め

ベラーが「歴史」で行った議論は、構造＝機能主義の擁護という目的にとどまらなかった。またその評価もオリジナリティが高くデュルケムの再評価に成功している。ベラーの学説形成過程において大きな影響力をもったのはパーソンズであり、それ故にベラーはパーソンズ左派と目されている。パーソンズは『構造』において、自らの主意主義的行為論を立論する上で、その時点で参照が可能であったデュルケムの主要な著作の検討を行っている。ベラーのデュルケム評価へのパーソンズの影響に関して筆者が知る範囲で記述されたものはないが、少なくともこの「歴史」においてベラーは、パーソンズのこの著作に参照を求めている⁽²⁴⁾し、それをこえている。

ベラーが論述の中で明らかにしたことは、具体的には次のようにまとめられるだろう。社会学と歴史学の概念的な区別について、デュルケムの議論の展開を追い、社会現象を現実の社会環境から説明する立場に、発生論的な見地を整合的に組み込んでいると評価する。さらにデュルケムが対象とした諸問題群を、歴史的視野に位置づいたものとしてとらえ、そこにこそデュルケムが歴史をどのように扱ったのかが具体的に把握できると考える。そしてデュルケムの社会変動論の骨格を、社会システムの変動＝「構造的差異化」と、「集合表象」＝社会的価値・制度との関係として整理し、特に「価値が社会変動に与える影響」の観点を、デュルケムがもっていたことを強調していた。また「構造的分化」の問題においては、個人主義、国家(普遍化の問題)、国家と二次集団の動的なバランスが個性を最大化すると理解していること、を取り上げた。さらに「集合表象」の問題においては、そのとらえ方が実質的に価値や制度に拡張し、宗教・ナショナリズム・プラグマティズムの問題を包摂する。この点で、社会変動論へのウェーバーの貢献のもう一方の側面をより広く制度的問題まで含めて、デュルケムは展開していたことを明らかにした。そしてベラーは現代的問題として、特に宗教・ナショナリズム・プラグマティズムが文化へ与えるインパクトに注目している。

『心の習慣』と「歴史」との関係については、次のようにまとめられる。ベラーがデュルケムの議論から引き出している問題群は、共通するものが多い。個人主義、国家と二次集団の関係、宗教、プラグマティズム、ナショナリズム等々。しかしさらに詳細にデュルケムの検討を行った『エミール・デュルケム 道徳論と社会論』(1973年)も含めて、理論受容のあり方のトータルな検討が必要であろう。これによってベラーがデュルケム理論を受容する際のバイアスが把握できるからである。これは次回の課題としたい。

最後に「歴史」においてベラーがデュルケムを評価しているのは、理論面の問題だけではないことを紹介することは重要だと思う。ベラーが、デュルケムを評価する基本的なスタンスは、彼が社会に深くコミットしながらも研究者として厳格な研鑽を行ったことへの共感にある。このことをベラーが述べた部分を引用して、本稿の締めくくりとしたい。

実際科学者としてのデュルケムは、自分の国家のための、自分の文化のための、そして自分の科学を含めて人類のための、責任の典型であった。産業革命に続く混乱のなかで生まれた社会学が、私た

ちがこれから生きてゆくだなかで、あの様な混乱の解決に貢献する助けとなればということが、彼のたつての希望であった。けれども彼は同様に、科学の厳しく厳格な原則に忠実であった。如何に危機が深刻であるとしても、科学の原則は急がされるべきではない。これらの二つの忠誠の間で、彼は豊かで生産的なそして道徳に関与した (committed) 生活を送った。

デュルケムへの最も偉大な賛辞はもちろん、彼の仕事が生きた活力を持ち続けているという事実である。私たちがすぐにデュルケムを乗り越えることが、彼の望みであつただろうけれども、それはまだ私たちに教えるものを多くもっている (461 頁)。

註

- (1) R.N. Bellah, 'Durkheim and History', AMERICAN SOCIOLOGICAL REVIEW, vol.24, Number 4 (August 1959). この「デュルケムと歴史」は『エミール・デュルケム』(Emile Durkheim, with selected essays. selected and edited by Robert A. Nisbet, 1965)に採録されている。註も含めて全くの採録であり、1959 年「デュルケムと歴史」からのベラーのデュルケムに関する評価の変化をうかがいしめることはできない。
- (2) R.N. ベラー他著『心の習慣』(島蘭進, 中村圭志訳)みすず書房, 1991 年。原著は, Robert N. Bellah et al., *Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life*, University of California Press, 1985.
- (3) 『心の習慣』VI~VII 頁。
- (4) 前掲著第 10 章参照。ベラーは、アメリカ合州国史の中で現代を「第三の試練期」とみている。この点に関しては、ベラーの『破られた契約』(1983 年。原著 1975 年)も参照。
- (5) ベラーが『破られた契約』において、「市民宗教」や「神話」という言葉で問題にしようとしているのは、この次元に属する。「市民宗教」は、『破られた契約』において次のように説明されている。「どの民族の生き方の中にも見いだされると思う宗教的次元——すなわち、民族が超越的実在との関わりの中で自らの歴史的経験を解釈するための〔意味の〕次元——のことである」(同書 29 頁)。この次元を通じて、人々は国家にコミットすることが可能になるのである。『心の習慣』においては、この次元のさらに基層のメカニズム——「市民宗教」を生み出すメカニズム——に分析を進め、共同体の問題を包摂している。
- (6) 『心の習慣』VII 頁。
- (7) 「スト権スト」は戦後史の大きな画期である。それ以降労働運動が官民どちらの領域においても窒息させられたことは、言うまでもない。熊沢誠「スト権スト・1975 年日本」(清水慎三編著『戦後労働組合運動史論』日本評論社, 1982 年)参照。
- (8) 筆者は、第 2 次世界大戦敗戦後の日本の社会的合意の核は、「平和」(peace)と「繁栄」(prosperity)を通じた、個々人の自由 (free) な、幸福 (happiness) の追求であると考えている。現在、自衛隊の海外派兵や「平成大不況」によって、社会的合意の枠組みそのものが壊れようとしている。また「個々人の自由な、幸福の追求」の内実は、精神的なものより物質的な満足に傾斜していることは言うまでもない。そのため、「幸福」は揺らぎやすい。
- (9) 『心の習慣』327 頁参照。
- (10) ベラー『破られた契約』第 6 章「新しいアメリカ神話の誕生」参照。
- (11) ベラーの著作をみると、ウェーバーの社会理論に関して独自に検討したものはない。さらに宗教と政治・経済の関係においては、パーソンズが『経済と社会』で行った AGIL と境界交換の理論

によって、具体的な分析を行っている。「本書で用いられる社会学理論の理解のために」(邦訳『日本近代化と宗教倫理』11～18頁参照)。

- (12) *Emile Durkheim on Morality and Society*, selected, edited and with an introduction, by R.N. Bellah, University of Chicago Press, Heritage of Sociology Series, 1973. この著作においてベラーは、47頁にわたって「社会的思考のフランスにおける伝統」という題で、デュルケムの学説とその形成史を紹介している。この撰集の構成とそこに載せられている論文名を明らかにすることは、ベラーがデュルケム社会理論の何に注目していたのかを知るうえで意味があろう。ベラーの紹介を除いて4部から構成されている。
 1. 社会学と社会的行為(収録論文:①「リセ生徒の理解への講演」,②「1789年の諸原理と社会学」,③「個人主義と知識人」,④「知識エリートと民主主義」)。
 2. 道徳性の進化(収録論文:①「有機的連帯がしだいに優越すること」,②「有機的連帯と契約的連帯」,③「これまでの結論」,④「結論」)。以上は『分業論』に所収されているものである。
 3. 道徳性の学習(収録論文:「人間性の二元性とその社会的条件」)
 4. 社会的創造力(収録論文:①「トートেম原理またはマナの觀念の発生」,②「宗教生活の原初形態」)。以上は『原初形態』に所収されているものである。
- (13) 「分離の文化」については、『心の習慣』350頁を参照のこと。
- (14) ソルボンヌにおける講義より構成されている。
- (15) 宮島喬『デュルケムの社会理論の研究』第2章「社会と個人」参照。後にパーソンズは、デュルケムがめざしたこの個人主義のあり方を、「制度化された個人主義」と呼び、高く評価している(パーソンズ『社会体系と行為理論の展開』222頁参照)。
- (16) デュルケムは、フランス教育改革で世俗化が問題になった時に、改革の中心である宗教道徳から共和主義に導かれた公共道徳への転換において、理論的な中心人物となった。また世紀末フランスの反ユダヤ主義やナショナリズムの台頭に、個人主義の価値を擁護し、「ドレフィス事件」にも積極的にかかわった。ベラーは、1970年代以降のアメリカ社会の「第三の試練」ととらえ、特に『心の習慣』を執筆した1980年代には、「個人主義が病的な増殖を遂げ」、それと対応する専制的「学校教師国家」が出現するのではないかという、強烈な危惧に導かれている。
- (17) ベラーは「社会変化を説明するのが不可能であり、歴史に興味を感じない」と評価されている、と紹介している(447頁)。
- (18) 「歴史学は特殊に関係する。社会学は諸類型と諸法則に関係する。社会学は、諸事実をそれ自身だけではなく一般的原理の例示として、比較可能な構造と分析的な理論を用いて研究する」(448頁)。
- (19) この類型学はデュルケムが「社会種」と呼んだもののことである。
- (20) ベラーは、スメルサーとパーソンズの『経済と社会』において、「最近構造的差異化の理論がかなり全面に押し出されてきた」ことに注意を促している。前述したように、パーソンズは『社会的行為の構造』においては、『分業論』の社会変動(パーソンズの用語では「社会分化」)を対象にしているが、全く評価がひくい。邦訳『社会的行為の構造3デュルケム論』13～14頁を参照。
- (21) ここでベラーは、「集合表象」を、デュルケムは後に「理念」と呼んでいることを、さらにベラー自身は「価値」と呼ぶことができる、と注記している。
- (22) ベラーは以下のように、この点で高くデュルケムを評価している。「デュルケムの構造的分化の概

念に伴う社会過程での集合表象の役割についての結論は、社会変動の实りの多い理論の輪郭を提供する。このような理論の開拓において、未来の仕事の方向性を示唆している」(459 頁)。

- (23) デュルケムはこれを、宗教としてではなく自分の理想を体現した国家像として考えた。デュルケムの理想主義的な国家像は『道德教育論』(邦訳第 1 部第 5 講 112 頁)においてみられる。国家主義の台頭する世界大戦前夜において、それを痛烈に批判しつつ共和主義擁護を堅持するデュルケムの実践の産物でもある。またデュルケムは、フランス公教育の世俗化、宗教に基盤をおかない共和主義公共道德の立案者であったことも、大きく係わっている。さらにベラーはデュルケムが、ナショナリズムに対する考察も行っていることに注意を促している (460 頁)。
- (24) ベラーがパーソンズの著作に参照を求めているのは、パーソンズのデュルケムの生誕 100 年記念論文集『エミール・デュルケム 1858-1917』(1960 年) 所収の「社会システムの統合理論におけるデュルケムの貢献(以下「貢献」と略する)」, さらに『経済と社会』(1956 年)や『核家族と子供の社会化』(1955 年)である。

パーソンズの『社会的行為の構造』と「貢献」でのデュルケム評価の違いは、ここでの論点ではないが、若干触れておく。

小関藤一郎の「パーソンズのデュルケム解釈について」(『社会学部紀要』関西大学 1979 年 38 号)でその概略が示されている。小関は、パーソンズがデュルケムの理論の展開を、『構造』においては「基本的に変化」したと見ていたが、「貢献」においては「重要な発展があった」とみる見方に変わったことを、具体的な論述に即して検討している。そのなかでも最も大きな変更は、『構造』において、「社会変動論理論がはっきりと欠落している」(『構造』邦訳第 3 巻 208 頁)とみていたものが、変更されたことであるとしている(48 頁)。さらにこれを、「ベラーの研究を摂取した後修正されたものであるといえる」(47~48 頁)と指摘している。この記述は、ベラーの「デュルケムと歴史」がパーソンズの「貢献」に参照を求めていることからして、前後関係が問題となる。ベラーの「歴史」は、1958 年 8 月のアメリカ社会学会年次大会での報告を追加訂正し原稿化したものであるから、パーソンズとベラーは、それぞれの論文を原稿化する段階において、お互いの論文に関して検討が存在したものと考えられる。ともあれ、パーソンズの変化とベラーのデュルケム理論の変動論的側面の評価——特に構造=機能主義が歴史概念を持ちえよとの指摘——が、なんらかの関係をもったことは小関に同意したい。パーソンズ左派と言われるベラーの、師パーソンズとの、社会理論の焦点と含意の違いに関する、もっと厳密な評価は今後の課題になる。

参考文献 (註であげてないものに限る)

- R.N. ベラー『日本近代化と宗教倫理』(堀一郎、池田昭訳) 未来社、1966 年(原著 1957 年)。
- 〃『社会変革と宗教倫理』(河合秀和訳) 未来社、1973 年。1963~70 年に書かれた論文を集めたもの。
- 〃『破られた契約』(松本滋、中川徹子訳) 未来社、1983 年(原著 1975 年)。
- E. デュルケム『社会分業論』(田原音和訳) 青木書店、1971 年(原著 1893 年)。
- 〃『社会学的方法の基準』(宮島喬訳) 岩波書店、1978 年(原著 1895 年)。
- 〃『自殺論』(宮島喬訳) 中央公論社『世界の名著 デュルケム・ジンメル』版、1980 年(原著 1897 年)。
- 〃『道德教育論』(麻生誠、山村健訳) 明治図書、1964 年(原著 1925 年。デュルケムの死後出版されたもの)。

- 〃 『宗教生活の原初形態』(古野清人訳) 岩波文庫, 1975年改訳(原著1912年)。
- 〃 『フランス教育思想史』(小関藤一郎訳) 行路社, 1981年(原著1938年。1904~1905年にパリ大学で行った講義がもとに, 死後出版された)。
- T. パーソンズ 『社会的行為の構造』(稲上毅, 厚東洋輔, 溝部明男訳) 木鐸社, 1~5 1976~1989年(原著1937年)。
- 〃 『社会体系と行為理論の展開』(田野崎昭夫訳) 誠信書房, 1992年(原著1977年)。
- 〃 『経済と社会』(富永健一訳) 岩波現代叢書, 上・下1958・59年(原著1956年)。
- 〃 『核家族と子供の社会化』(橋爪貞雄他訳), 黎明書房, 1970年(原著1955年)。
- T. Parsons, 'Durkheim's Contribution to the Theory of Integration of Social System', *Emile Durkheim*, 1858-1917.
- R.K. マートン 『社会理論と社会構造』(森, 金沢, 中島共訳) みすず書房, 1961年(原著改訂版1957年)。
- 宮島 喬 『デュルケム社会理論の研究』 東大出版会, 1977年。